

ピグマリオン教育観・人間観

- 教育観としてのピグマリオンマインド…子らの善き可能性を心から信じること

(ピグマリオン教育観5項目)

- ① すべての子の心には、真善美を愛し、進歩・向上を計ろうとする強い欲求が潜在しています。
- ② すべての子の行動・態度の中には、すでに賞賛すべき価値がたくさん見えかくれしていて、それらの価値は日々力強く育っていきます。
- ③ すべての子らには、未知なる素晴らしい才能が潜んでいて、その才能はいつの日にかきっと現れ、育っていきます。
- ④ すべての子の心には、人智を超えた驚くべき仕組みとはたらきが備わっていて、自然成長力、感情安定力、自然治癒力は、その心のはたらきの現れです。
- ⑤ これらの心のはたらきは、リラックスしているときにはぐくまれ、その力を一層強めます。

ピグマリオン効果 (Pygmalion Effect) 1964年

アメリカ、ハーバード大学のロバート・ローゼンソール教授 (Rosenthal, R) が提唱。
1968年論文に発表 (Pygmalion in the classroom)
教師が子どもたちに対して抱いている期待が、学習成績に影響することを実験で証明。
ローゼンソール効果とも言う。

1. ローゼンソールがサンフランシスコの小学校を訪れ、「今度ハーバード大学で開発された『学習能力予測テスト』は、1年後の学習成績を正確に予測できるテストであると先生たちに伝え、許可を得てテストを実施。
2. テストに加え、様々な調査も行ったがそれらは、先生たちを信用させるための演技で、テストも当たり前の知能テストであった。
何ヶ月にもわたる手の込んだ調査で、先生たちはその調査結果はアテになるものだと思いこむ。
3. 調査結果が先生方に知らされる。
実際は、成績には関係なく無作為にサイコロを振って選ばれた生徒のリストを示し、「予測テストとさまざまな調査の結果から見て、この生徒たちは、1年後に必ず良い成績が予測できる」と伝えられる。先生たちもそう信じた
4. 8ヶ月後、一定の限度はあるものの、リストに載せられた生徒たちの知能偏差値は向上し、総合学力においては、一人の例外もなくその期待通りに向上した。

ローゼンソールの結論

- 教師が、その生徒を、本心から「できるはずの子」だと信じて接したため、励ましの言葉や態度、好意に満ちた眼差しが、生徒の自己概念を高め、向上心を呼び起こし、教師も熱意を持って指導に当たったため、結果として学習成績の向上を見た。

- ① はじめに 教師の態度
肯定的言葉掛け ・生徒の長所を見つける ・進歩をほめる ・積極的に期待をかける
肯定的・受容的態度 ・ほほえむ ・うなづく・温かい言葉かけ・温かい
- ② すると 生徒の自己肯定感の高まり
・自信と自尊の心が生まれる(自分は結構できるのかも知れない)
- ③ そして 生徒の向上心の高まり
・学習意欲につながる
- ④ 結果として 学習成績の向上



「人が心から願うこと・期待することが、よい結果を生む」として
ピグマリオン効果と名づけた。